

昭和二〇・九月上旬 連隊主力シヤム国ウボン
県ウボン市に集結。ウドン附近に在りたる一
部ウボンに集結す。

昭和二〇・一二月月上旬 連隊主力ナコンナヨー
ク集結す。

終戦後ナコンヨークに於いて、約三〇〇人、
主としてビルマ方面より後退せる人員、当連
隊に転属す。

昭和二一・三・五 シヤム国転進際、配属中の
山砲第五十二連隊第一中隊及該連隊盤谷先発
要員一六〇人、当連隊に転属す。

南支から中支へ

召集の想い出（その三）

愛知県 竹内 章

木村副官からは、別れて以来何の連絡もない。
心配であるし困ってしまった。海州の本隊に連絡

しようとしても通信網は破壊され不通だ。鉄道通
信をと思つて徐州駅へ行つても、これもまた同様で
駄目である。鉄道は八路军が住民に破壊され、い
つ復旧するか不明で心もとない。津浦線はたまに
列車が入ってくるので徐州駅で情報をキャッチで
ある。

山海関方面より帰ってくる兵隊の話によれば、
ソ連は、昭和十六（一九四一）年四月十三日に、
日ソ中立条約が締結されているのに昭和二十年八
月八日、突然に、日本に対し一方的に宣戦布告
し、満州国に雪崩れこみ、軍事及び企業などの施
設を破壊し、収集するなど、まるきり火事場泥棒
同様で、関東軍も無抵抗状態であるとのことであ
つた。隴海線が一部開通した様子であるが、生
命の保障はないとの事である。

木村副官と連絡がとれたので状況を報告し、腹
を決め、海州へ帰隊することにした。徐州駅に行
くと、同様に待機の各部隊の連絡兵が集結をして
いたので心強く思った。早速乗車し海州に向か

う。距離は名古屋、東京間位ではないかと思う。この貨物列車は、はがゆくなるほど速度が遅く、遅々として進まない。それはレールの状態を確認しつつの徐行運転であるためである。線路の枕木の釘が抜かれているので釘を打っては進行する。その度に停車する。

今度はレールが外されている、貨物列車に乗せてあるレールを敷設する。その間、手の空いた兵隊は作業員警備のために歩兵銃を構えて交代で立哨である。いつ敵襲にあうやもしれず、絶えず目を四方に配る監視で非常に神経を使う。

こうして夜遅く、ちょうど中間である新安鎮駅に着くことができた。ここには大隊本部があり、歩兵砲中隊や機関銃中隊もいるので安心でき、ここまでお互いに無事であった事を喜びあう。この先続けて運行することは無理であるので、駅の広間を借用し、警備隊の給与を受けて宿営する。何事もなく夜が明けた。

使役と警備、寝不足と緊張で体の節々が痛い。

そんな事もいつておられないので体を起こす。また昨日と同様の行動の繰り返しである。まだまだ不安と緊張の連続である。色々な思いを胸に描きつつ列車はまた徐行運行である。

反対側の線路の外に一列車が横転している。恐らくレールを外されての惨事であろう。前方車輛に後続の客車がのめりこみ、重なりあっている。来客は押し潰され、一客車で四、五十人位は即死である。何輛か連結しているので、その惨状は目を覆わせるものがある。首が胴が、そして手足が客車の窓などから出ている状況は悲惨で胸がしめつけられる思いだ。また夏の事で蠅はたかり、死臭がプンプンと臭う。列車事故の恐ろしさと悲惨さを見せつけられたのである。これでは列車運行には運転手も慎重にならざるを得ないであろうし、我々も急がなくとも安全確認で運行してほしいと思った。

夜間の運行には路線の欠陥個所の発見が難し

い。そして夜間の作業中の警備は真つ暗闇で、釘を打つ金属音は何か無気味で心臓に強く響き、前方を見つめていても薄気味の悪いものであった。やがて列車は滑り込むように海州の駅に到着した。

下車した各兵隊も、疲労の中にも何か明るかった。ああよかったと胸をなでおろした。急ぎ帰隊すると、部隊の戦友は、自分のことのように喜んでくれた。音信が絶えて十日以上にもなると、いろいろな情報が飛び、戦友の考えでは全員捕虜か、戦死かと思ひ非常に心配をしていてくれたとこのことで、ただただ感謝感激であった。

早速、小南兵長に頼んで、自動車ガソリン（芋アルコール）を一升壘に一杯貰つて、戦友と共に私の無事帰還の祝杯をあげる。

いよいよ、正規軍（重慶蒋介石軍で、兵力は南京で急募したとのこと）の進駐である。我が部隊の前を通過する。軍装は藍衣で綿入の縫い取りを着用、草履ばきに、番傘を一本背負つて、銃を肩

に行進してゆく姿を見ると何だか淋しくなる。

間もなく重慶軍旅団長が進駐し、武装解除、兵器の接収が始まる。この接収が問題である。糧秣、衛生材料、衛生器械、自動車等の員数外の要求があったと係から聞く。兵器の接収などすべて完了し丸腰となる。ところが丸腰になったこの夜から毎晩、彼ら兵隊の集団略奪が始まった。今日は他人の身、あすは吾が身である。他部隊では争つた将校、下士官が射殺されたとの事で、我が部隊では絶対抵抗しないよう伝達があった。素手にピストル強盗では勝ち目はない。

当部隊も度々来襲を受け、復員準備で纏めてある装具を持ち去られ、被害も大きかった。その都度戦友同志が助け合い、盗難援助をするので背囊がだんだん軽くなってゆく。このように夜は強盗に戦々恐々とし、昼間は道路敷設、補助の使役である。この時程しみじみと敗戦を味わい、捕虜としての実感が湧いてきた。

部隊員が増加し診療にも支障が生じてきたので、町中の元特務機関連絡所へ移動、診療を開始した。その頃部隊の復員計画では昭和二十二年の暮れであるといわれていた。

終戦翌年の一月の頃と思うが、新安鎮の大隊が何個師団の八路軍の襲撃をうけ、激しい戦闘となり、その救援依頼が入ったとのことである。しかし救援に出るにも兵器は無く、そこで重慶軍の旅団司令部と話し合った上、兵器の借用を受けて、救援の部隊編成がなされて出発した。話によれば、途中障害もなく新安鎮に着くことができたとのことである。敵は包囲陣を解き、一旦救援部隊を入れた上で口をとり包囲し激戦を交えた。

その中であって敵側から白旗を立てた軍使が出され「降伏勧告」とのことであった。話合いが決裂すれば全軍全滅である。そこで大隊本部は師団司令部に指示を仰ぎ、司令部は重慶と交渉し、降伏を決定、兵器の引渡しを完了して新安鎮を撤収し、海州に集結することになった。その折、八路

軍から、戦闘全軍各兵に対し金銭給与があったと聞く。また兵器の接収を受けた日本軍は丸腰で民衆の攻撃をうける恐れもあるため海州地域まで護衛もしてくれたとのことである。

撤収の折、八路軍から撤収諸兵器の操作指導教官として、将校、下士官の残留要請があつて、少尉以下約一個小隊が残留することとなったが、その役割を完了して一カ月後には原隊に復帰したのである。話によればその間の待遇は非常に良く、何の不自由もなかったとの事である。しかし終戦後の翌年に敵と戦闘を交え、犠牲となった諸兵に対しては心から哀悼の意を表したいものである。

終戦後は「功績室」勤務を除き、大した作業もなかったので、診断室で西村軍医中尉（婦人科医師）から婦人科の人体構造や性医学を学ぶのが楽しみでよく集會し教育をうけたものである。また小隊に分かれ、交代で墟溝（蒋介石夫人宗美齡の別荘所在地であり風光明媚な土地）に行き、ダイ

ナマイト漁法で魚を捕り舌鼓をうったのも楽しみの一つであった。

毎日する事もなく、本に親しんだり、囲碁、将棋をしているのも退屈で体がなまってしまふ。また何人かの兵隊が、冗談ではあるが、どうせ日本に復員しても、爆撃で家があるかないか、妻子や親兄弟の生死も不明で、帰っても何の希望も楽しみもない。いっそ、八路軍へでも投降したい気持ちだともいつている。真実の声であろうと思つた。

八路軍に入隊すれば、兵は下士官に、下士官は将校に、尉官は佐官に特進の噂が出ていたのがこんな話題に発展したと思う。

私はこれらの戦友に対して「召集の後先はあるにしても、戦場で長年生死を共にした仲だもの、内地に一緒に帰ろうや、郷里では恐らく、家族、親族、知人友人が、首を長くして待っている事であろう。万一頼る先がなければ私のところにこいよ、相談にのるから」と言い、元気づけたのであ

る。

奥地の開封方面から在留邦人が大勢引き揚げて来た。中には病人もあるので往診である。私も軍医に随行してゆき、引揚げ模様を聞くと、気の毒で頭の下がる思いがする。ご婦人などは、頭を坊主刈りにして、軍衣袴のよごれたのを着用し、顔には泥や炭を塗って、魔手を逃れ、命からがらの引揚げであったとのこと。また病人に困つたとか、涙をのんで血を分けた子供を手離して来たとか、すべて涙の物語である。

復員予定が、急に早まった。これには米軍のLST（定員三千人という）の艦長が、日本軍の輸送を完了すれば、特別休暇で米国に帰ることができるので、この復員計画を早めたとのことであるが、真偽の程は不明である。

すべての業務を閉鎖し、捕虜収容所に移動、入所することとなった。周囲はバリケードで囲まれている。姑娘、ショーハイが、柵の所まで、いろ

いろな物を売りにくる。私は水筒（水筒には九九〇cc入る）の中に支那酒を満杯にした。私はこれで復員準備完了である。

この収容施設は煉瓦を土で固めて建てられ、暗く、居住施設としては下であるが、捕虜の身分であり、乗船までの暫定期間で仕方がないと諦める。

昭和二十一年三月下旬、突然に「所持品を持って、広場に集合せよ」との指示があった。所持品の検査である。携帯天幕を広げ、その上に、自分の所持品を背囊から取り出して並べる。やがて検査官が廻って来た。私は使い残しの関金券（儲備券が通貨であるがインフレで大暴落し代わりの新兌換券）を検査官に差し出したが無検査で通り過ぎて行った。

乗船命令が出た。連雲港まで歩かなければならないが、それには一つの不安があった。それは途中で土民の襲撃に遭い、携帯品を略奪されること

があるとの噂がとんでいたからである。しかし何事もなく目的地に着き無事に乗船できた。

ホツと安心感に浸り、携行した支那酒を戦友と共に交わし、大いに語り合う。

出港して、三日位経過したかと思うが、遙か水平線上に一つの島が見えた。濟州島とのことである。やがてLSTは、旧佐世保軍港に入港することができた。所定の手続きを完了して上陸、何年ぶりかの本土の大地をしっかりと踏み締めた時、心にジーンとくるものがあった。「やっと帰ることができた」と目頭に熱いものを感じ、生きていく良かったという実感が彷彿と湧いてきた。

携帯品を所定の位置において消毒室に入る。背中と言わず全身にDDTを掛けられて真っ白で気持ちが悪いくらい。携帯品を広場に取りに行くと、所持して来た衛生器、医薬品、その他の貴重品が何一つ見当たらない。この地域はオーストラリア兵の警備担当で、程度は余り良くないとのことなの

で、まるで泥棒にあったようなものである。

日本の警察官の指示で二列縦隊に整列、足弱と病弱者はトラックで輸送され、健康な者は背囊を背に徒歩で南風崎まで行軍である。四キロ位あったかと思うが、足の早い者、遅い者があり必然的に隊伍が乱れる。若い警察官が「お前達がこんな風だから、日本が負けたのだ。お前達は敗残兵だ。しっかりと整列して歩け」と侮辱的な発言があった。復員兵の中には九州の初年兵が沢山いる。彼らは作戦も知らず終戦を迎えたが、張り切っていて元気が良いので「敗残兵とは何事だ、許せない」と多数で警察官を殴ってしまった。相手が悪い。当然問題となることは申し上げるまでもないことである。結果については不明であるが、大事には至らなかったようである。

やっと南風崎の収容所に収容され、大広間で雑魚寝である。福岡薬剤中尉の顔が見えないので聞くと、伝染病に罹患し残されたとの事であり、その後死亡されたとのことで、せっかく日本の土を

踏みながら気の毒なことをしたと思った。

宿舎の入口に貼られている「全国の戦災地地図」を見ると、自分の郷土も被災している。途端に一刻も早く帰りたくなって来た。ここで将校、下士官、兵別に現金が支給された。支給額は兵で二百円（昭和二十一年二月十七日に新円切り換えがあつて旧円には証紙が貼られている）であつたと思う。

日本は異常インフレで物価の高いのを知った。収容所近くに夏蜜柑、スルメなどを売りに来るので、珍しがって買おうものなら、たちどころに金がなくなる。こんなところで金を使つてしまい、これから先どうして郷里に帰るのであるのか。他人事でも心配になる。

愛知県地方は遠山軍医少尉が輸送指揮官、私が副となる命令が出ているので、何かと連絡事項があり忙しい。収容期間が解かれて、いよいよ出発である。列車を見れば貨物である。相変わらずだ

なと思った。門司に到着し、ここで客車に乗り換えさせられた。明るい客車で座席には余裕があり、このまま、快適な旅行ができると喜び、さすがに負けても日本だなと思う。

下関に到着した。このまま臨時列車として名古屋まで行けると思っていたのに大間違いで、これは回送車であったのだ。下車を命ぜられ、プラットホームに降りる。ホームは復員兵で占領されている。邪魔になるので駅員に駅外へ出るよう指導された。一旦、駅の待合室に移動、私は副指揮官として、乗車について駅側と交渉した。復員兵が多数なので臨時列車を設けるとの回答なので、このことを改札柵が上がって、前方から後方へ伝達させ、騒ぎを手で制した。

しかし一向に列車が出る気配もないので駅側に問うと、もう少し待ってくれとのことである。一般乗客の大阪行の改札は既に終わって発車待ちである。我々は臨時列車とのことで静粛にしていたが、列車がいつホームに入るのか、発車がいつな

のか不明なので、もう一度念のために確かめに行ったところ、ラチがあかず、騙されていた感じであった。

とうとう堪忍袋の緒が切れて、私は改札柵に上がると、大声で全員の復員兵に、駅側の不誠意を伝え、家庭に早く帰りたい者から、現在停車中の大阪行きの列車が間もなく発車するので敏速に乗り込むよう、指示する。私も早速飛び乗る。復員兵も窓口に駆け寄り、窓から携行品を投げ込み、続いて本人も飛び込むので乗客は迷惑であろうと思う。これも言うなれば駅側の責任であり、下関駅員位苦々しく思ったことはない。一般の乗客を大切にする気持ちはよくわかるが、我々として甘える訳ではないが、赤紙一枚で生命をかけて奉公し、難儀の上に戦争の苦勞をなめ、やっと日本の土を踏めばこのさまだ。

日本人の復員兵に対するこの態度が腹立たしい。

列車の中はそれこそ立錐の余地もない状態の中で、お互いに譲り合い、助け合いそして話題は豊富でつきない。窓からの用を足し、婦人をそのために窓から上げ下ろしする姿、なんとなく暖かいものを感じ、兵隊もなかなか愛敬ものである。

大阪で下車すると、浮浪者がいっぱい屯している。復員兵や引揚者がよく携帯品を剥ぎとられると注意をされていたので、梅田から近鉄上六駅廻ることにした。近鉄に乗車し中川駅で乗り換えの時である。ビックリした。乗り換えでプラットホームに降車した時、駅員が我々の前に整列し、駅長が「復員の兵隊さん、長い間ご苦労さんでした」とお辞儀をされた時、心から「有難うございます」と直立不動の姿勢で答礼、自然に頭が下がった。このことでそれまでの心のモヤモヤしていたものが消し飛んで朗らかになった。

名古屋駅頭で、お互いに、今後の活躍と健康を祈りながら別れを惜しんだ。

武豊線に乗り換え、発車まで少し間があった。

ちようど同じ客車に、都築衛生伍長が乗り込んできた。終戦後に嘘溝の陸軍病院に転属し、別れ別れになっていた彼との出合いは、教育期間が終わって野戦立ちしたのが名古屋駅で、復員した時に名古屋駅の武豊線内とは奇遇の何物でもない。お互いに手を取り喜びあった。

半田市も地震と戦災で大分変わっているのではないかと心配で、我が家が無事であってくればよいのにと、イライラしてくる。待ち時間とは長いものである。

半田駅に到着、下車し駅頭に立って見れば半田駅通りが、歯抜けになり淋しい通りに様変わりしている。聞けば、駅舎、郵便局、電話局の公共建造物があったための強制疎開とのことである。はやる気持ちで、早足で家に向かう。棟が見えた、何ともなさそうである。やっと心臓が落ち着きを取り戻した。

都築伍長が、私の家庭に立ち寄ってくれたので、家族を混じえ、妻の心ばかりの手作り料理

で、お互いの無事な復員を喜び、とっておきの清酒で祝杯を上げた。

平成十三（二〇〇一）年一月、私は数えて八十六歳、女房と合わせて百七十歳で、兩人共、至極健康で元気なので、夫婦で二百歳まで健康でありたいと思う。さてこの歳で手記するとは夢にも思わなかったが、鳳兵団、専兵団に所属した私の「石集の思い出」としたい。

終わりにあたり自己紹介すると、私の家庭は健康家族であり、去る二〇〇〇年五月五日、半田の目抜き通り（三一メートルの幅員）の改修竣工に当たり、記念の渡り初め式が行われ、私共、親子、孫の三夫婦がその光栄に浴した事は、永久的に名誉であると思うので付記する。

【解説】

終戦時の北支

昭和二十年八月九日、ソ連軍の一方的宣戦布告という理不尽な行動は、後のソ連抑留者強制労働

につながるものであるが、北支に於いても、共産八路軍と蒋介石軍との両者よりの圧迫により、日本軍は大きな苦勞をしたことは、現地当時の部隊の語るところである。

また、鉄道では、枕木の釘が抜かれる等の妨害行為があり、一般、無辜の現地住民にさえ大きな犠牲が出たことも記されている。

我が軍の鉄道隊は貨物列車にレールを載せ、このレールを敷設し徐行して行ったという。戦争集結時、治安の乱れは理解し得るが、終戦後における中国諸軍の末端部隊の行動は、自国民を犠牲にしたものであった。敗戦日本軍が、作業員警備のため、銃を構えて交代立哨したし、妨害を排除しつつ復旧したという、鉄道隊の苦勞も察せられる。

これがため、我が軍の兵士は、使役と警備により、不眠不休、また、夜間の運行には路線欠陥個所の発見が困難、その真つ暗闇で、釘を打つ金属音は何か不気味で心臓に強く響き、前方を、神経

を使つて見つめていても薄気味悪いものであつたと、筆者竹内氏も記している。

終戦は知らされても、鉄道の修復や、輸送に従事した隊員の苦勞も察せられる。また、その間、敗軍の日本軍は如何なるか、不安の日々であつた。解説者も、中、南支で終戦を迎え、広西省から湖南・湖北省と徒歩、東行したのであるが、有史以来、敗戦を知らぬ我々は、日本の将来、軍の今後、我々自身、家郷の状況等に心を痛めての日々ではあつた。

特に「暴に報ゆるに徳を以つてす」と宣言した蔣總統、北支に勢力を持つ共産八路军との、国共の争いの兆は既に現われていた当時、降伏日本軍、日本国の将来に大いなる不安を感じつつの日々であつた。

また、武装解除、兵器の接収は……戦勝国、対象は蔣軍となつているが、北方、八路军の兵力は強く、我々は何方に組するか、不安な日々であつた。中南支方面は概ね蔣軍と決してはいるが、中

支にも共産新四軍と蔣介石系、国民政府軍が占領をしていた。我が日本軍は降伏は国民政府軍と明言していた故、我々は何ら迷うことなく蔣軍を正当な、降伏対象政府と決し処置をしていた。

しかし、竹内氏の体験記によれば、昭和二十一年一月頃、新安鎮の大隊が、八路军の襲撃を受け、重慶軍の兵器を借用し新安鎮に着いたが、八路军は我が救援部隊を入れた上で我が軍を包圍し激戦を交えた。その上、八路军軍使より、「降伏勧告」とのこと、話し合いが決裂すれば全軍全滅とのこと、大隊本部は重慶と交渉し、降伏決定、兵器を引渡し新安鎮を撤収し、海州へ集結になつたと言う。

撤収の折、八路军は兵器操作指導教官として将校、下士官の残留要請があり、一個小隊が残留、一カ月後に原隊復帰したという。しかし、終戦翌年敵との戦鬪で犠牲になつた諸兵があつた。

また、八路军に入隊すれば、兵は下士官、下士官は将校に、教官は佐官に特進の噂が出ていた。

また、奥地の開封方面からの在留邦人が大勢引き揚げ、病人に対し軍医が随行し往診した折、引き揚げの模様を聞き、気の毒で頭が下がる思いがした。ご婦人等は男装もし魔手を逃れ、命からがらの引揚げであった。また、病人に困ったとか、涙をのんで血を分けた子供を手離して来たとか、すべて涙の物語りであった。

我々衛生隊は、すべての業務を閉鎖し、捕虜収容所に移動、入所することになったが、周囲はバリケードで囲まれている。

昭和二十一年三月下旬、乗船命令が出て、無事目的地に着いた。出港三日、LSTは旧佐世保軍港に入港。「やっと帰ることができた」という。

「全国の戦災地地図」を見ると自分の郷土も被災していた。

三埠攻略戦記

東京都 山崎 純夫

波濤万里を蹴りて衝く

白耶土湾に月しろく

時、神無月十二日

奇襲上陸ここに成る

青史を飾るこの朝

勲は永遠に薫るかな

あゝ我等南支派遣軍

広東に上陸以来、この軍歌を何十回、何百回歌ったことだろう。軍歌演習に、行軍に、そして今では戦友会の席上でも歌われる。

昭和十八（一九四三）年一月一日、広東に上陸以来、丸三年六カ月、南支、中支に駐屯もしくは抑留されていたことになる。